

1 病気の子どものための教育とは？

(1) 病気の子どもの現状

医学の進歩とともに研究が進み、的確な診断が行われるようになった結果、より適切な治療が行われるようになり、病気の子どもの実態の多様化や短期間の入院という状況が発生しています。こうした状況は、病気の子どものためには望ましいと理解しつつも、教育に携わる立場としては知らない病気が増え、支援の方策が見当つかないといったことや、入退院を繰り返す子どもが増え、学習内容の理解・定着に困難を抱えるといった状況もあります。

さらに、心の病気が増えている傾向にあるなど、病気の子どもの教育は大きく変わりつつあります。こうした状況は、病気の子どもの必要とする教育を受ける場と機会を確保するという観点から、大きな課題となっています。

病気のために入院する子どもは、厚生労働省「患者調査」によると平成11～20年の間で3分の2に減少しています。しかし、外来患者数はそれほど大きな変動はなく、病気の子どもの数がそれほど減っているわけではありません。また、2週間未満で退院するケースが多いため、入院した子どもは手続き等の関係で、病院内学級などに転校して授業を受けることができないケースも多くなっています。このことから、病気の子どもの多くが小・中学校等に在籍していると思われ、特別な教育的な支援を必要としない場合を除き、個々の病気の状況に応じた教育環境を整え、適切な指導と支援の必要があると考えます。

(2) 小・中学校における病気の子どもの教育（「学習空白」について考えてみる）

近年は、病状が安定したり、急な病状の変化等が見られなかったりする場合、短期間で退院し、その後日常生活をしながら治療を継続することが多くなりました。しかし、必ずしも完治していないため、引き続き健康面には注意が必要となり、こうした状況にある子どもにとっては、退院して学校に復帰しても様々な配慮の準備が求められます。

病気によっては、小学校入学までに治療をほぼ終了し、入学後は病状に応じた配慮だけを必要とすることもあり、例えば心臓疾患の場合は、入学前に手術を受けていることが多いため、入学後は特別な支援を必要としないように見えることがあります。しかし、乳幼児期での入退院の繰り返しから、日常生活経験が不足している場合が多々あります。そのために、知的な遅れがないものの学習内容を理解できない、様々な作業がうまくできないということがあり、こうした状況の見極めと適切な配慮のもとでの指導が必要です。

また、退院後も定期的な外来受診や体調不良などによる欠席のため「学習空白」が生じることがあります。「学習空白」と聞くと、その空白部分を埋めるための学習だけをすればよいと考えがちです。しかし、学習したことが断片的なため、誤って理解していたり、学習内容を混同して覚えてしまったりすることがあります。一度間違っただけで理解したことや誤った解答方法、誤った作業方法などについては、欠席が続くことなどにより、修正する時間がないまま、固定化してしまうことも少なくありません。子どもが学習に遅れまいとがんばって学習しても、学習内容を理解できなくなったり、体験や実技を伴う教科内容についてはうまくできなくなったりすることがあります。「学習空白」がどのような原因によるものかを把握し、それに応じた指導をすることが重要になります。